

次の文は、建礼門院右京大夫の歌集の一節で、死別した恋人、平資盛と過ごした日々を回想して、雪の日の出来事や山里での一齣を綴ったものである。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

雪の深く積もりたりしあした、里にて、荒れたる庭を見いだして、「けふ来む人を」⁽¹⁾とながめつつ、薄柳の衣、紅梅の薄衣など着てゐたりしに、枯野の織物の狩衣、蘇芳の衣、紫の織物の指貫着て、ただひきあけて入り来たりし人の面影、わがありさまには似ず、いとなまめかしく見えしなど、常は忘れがたく覚えて、年月多く積もりぬれど、心には近きも、返す返すむつかし。

年月の積もりはてもその折の雪のあしたはなほぞ恋しき

山里なるところにありし折、艶なる有明に起きいでて、前近き透垣に咲きたりし朝顔を、ただ時の間のさかりこそあはれなれとて見しことも、ただ今の心地するを、人をも、花はげにさこそ思ひけめ、なべてはかなきためしにあらざりけるなど、思ひ続けらるることのみさまざまなり。

身の上をげに知らでこそ朝顔の花をほだなきものと言ひけめ

(『建礼門院右京大夫集』より)

注(*)

人をも、花はげにさこそ思ひけめⅡ『拾遺和歌集』の和歌「朝顔を何はかなしと思ひけむ人をも花はさこそ見るらめ」を踏まえた表現。

問一 傍線部(1)で、作者は「山里は雪降り積みて道もなしけふ来む人をあはれとは見む」(『拾遺和歌集』)という和歌の一節を口ずさんでいる。このときの作者の心情を説明せよ。

問二 傍線部(2)を、適宜ことばを補いつつ現代語訳せよ。

問三 傍線部(3)を、「さこそ」の指示内容を明らかにしつつ現代語訳せよ。